新潟の水辺だより

niigata-mizubenokai report

Vol.100

●編集発行
特定非営利活動法人
新潟水辺の会
●発行日
2022年12月01日

report 01

新潟水辺の会 35 周年・新潟の水辺シンポジウム 2022 へ向けて

2023 年は新潟の水辺の転換期になります!

今年 11 月 10 日、新潟市がラムサール湿地都市認証を受けました。“認証都市に相応しい水辺とは?”の問いに応える政策や活動が、川辺や潟辺で始まると、期待します。大いなる提言が生まれ、それを試行する活動に広がります。

他方、子どもたちのクラブ活動が地域の受け皿に移されるという。それは見方を変えると「地域クラブ」の活動を進める好機になります。また、2023 年から新潟市で、中高生対象の SDG s教育旅行の体験プログラムが本格的にスタートします。否応なく地域発の「水辺体験プログラム」や「指導体制」の進化が必要になってきます。

高校生の環境学習プログラム：湖上栽培の空芯菜収穫体験

本シンポジウムの第 1 部では、水辺の会の発足から 2022 年まで 35 年間の総決算的な振り返りをします。

第 2 部では、様々な期待を担うことになる水辺のあり方を、水辺を生かし、楽しみ、守り、育てる指導者、特にジュニアリーダー育成と絡めて議論します。

課題は、2020 年水辺シンポジウムで示された問題提起（①いつも人の居る港、②カヌー教室、③潟公園キャンプ実験、④潟ポイント実験）です。未消化の課題を含め、

■これからの水辺のあり方（保全、活用、発展）

■多世代の協働によるジュニアリーダー育成

について各パネラーからご意見、提言をいただきます。

主な論点は、水辺を日常的にカヌー利用する**「地域クラブ」**、子どもたちにとって安全で楽しい**「多様な水辺と多様な指導者」**、**「SDG sな水辺の体験プログラム」**です。これらの可能性や課題、展望を会場参加者からも、意見提言を頂き、2023 のアクションプランにしていきます。

子どもたちのデイキャンププログラム：湖上浮島とカヌー体験

最後に、大熊孝元新潟市潟環境研究所長 (当会顧問) が『**新潟市がどうしてラムサール湿地都市認証に相応しいのか?―都市の自然観の創造に向けて―**』をコメントします。

コロナ禍で定員の制約がありますがぜひご参加ください。

代表世話人　相楽　治

本シンポジウムは（一財）セブン - イレブン記念財団「環境市民活動助成」、積水ハウス（株）「積水ハウスマッチングプログラム」の助成を受けて実施いたします。

■水辺レポート

report 02

通船川の川掃除に参加して（万代高校端艇部員の感想）

当会では新潟市立万代高等学校端艇部の皆様や地域のボランティアの皆様と協働で、通船川河口の森の美化活動、通船川の水面のゴミ掃除＊に取組んでいます。

水面のゴミ掃除に参加いただいた万代高校端艇部の部員の方より感想をいただきましたので紙面にて紹介いたします。

■川清掃で学んだこと

今回参加させていただいた通船川の清掃活動で、私は河川の清掃を続けることの重要性を学びました。

私は今、万代高校端艇部に所属し、通船川で日々練習をしています。約半年間、通船川で活動をしてきて強く感じることは、川に生息する生物の多様さとゴミの多さです。今回の川清掃ではそれを改めて意識する事ができました。

通船川に浮かぶゴミを集める万代高校端艇部の皆さん

清掃活動の中で特に印象に残ったのは、川の多様な生態系です。

普段活動している範囲にはムクドリ以外の野鳥はあまりいませんが、そこから少し進んだ所ではサギやカモを沢山見る事ができました。

また、力強く泳いでいく様々な魚、トンボなどの季節の虫たちも見る事ができ、川に生息する生物の多様さを感じる事ができました。

しかし、その多様な生態系に人の廃棄物が影響を与えているという事も強く印象に残りました。

普段練習している時もプラスチックごみが浮かんでいる事がよくありますが、今回のゴミの回収ポイントにはそれ以上の量の廃棄物が集まっていました。川の隅にはプラスチックごみやライター、針がついたままの釣り糸などが溜まっており、河原には酒類の缶やプラスチック容器が大量に放置されていました。

水辺の会の方から、「ここにあるゴミはいずれ海へ流れて、海洋プラスチックになって回収が困難になる」というお話を伺い、私たちが活動する通船川とその先に広がっている海を守るためにも、こうした地道な活動を続けていくことが大切だと感じました。

通船川は水質が段々と改善されてきていて、最近では藻が生えるようになりました。

この変化は、環境のための活動が続いてきた成果だと私は思います。

環境を破壊するのも、守り改善するのも人であるからこそ、地道に環境のために行動し続ける事が大切だと今回の清掃活動を通して学ぶ事ができてよかったです。

（万代高校端艇部　1年　女子）

■未来の子供達に綺麗な環境を残すために

今年初めて川清掃をしてみて、最初に思ったことは「意外とゴミが多い」でした。

普段、川の脇の道を通っている時には「川が濁っているな」程度の認識で、いざ水上に出てゴミ拾いをしてみると、そこにあったのは茶色く変色したペットボトル、明らかにわざと捨てられたであろうビニール袋に入れられた大量の缶、生活ゴミ、食べ残されたコンビニ弁当など、ものすごい量のゴミでした。さらに、それらのゴミからは今まで嗅いだことのない強烈な悪臭を放っており、「なぜ今まで気づくことができなかったのだろうか?」と自分の感覚に疑問を抱いてしまう程でした。

普段私は、北区に住んでいてこの川にあまり馴染みがなく、自分が部活動でこの川と関わる前の状態を知らないため聞いてみたところ、昔は水がトロトロするほど汚れており、数年前まで通船川には木材加工会社が川沿いにあり、その会社に木を運ぶためにこの川が使われていて、運んでくる木に付着している防腐剤が川の水に溶け込み、水質が悪化して水がトロトロして、水草が全く生えない状況だったそうです。

今は当時の面影が全くないと言っていいほど無く、むしろ水草が至る所に生えている状態にまで回復してきました。ですが、そこまで水質が回復したにもかかわらず、浮いていたり、沈んでいるゴミは一向に減りません。私が初めて川掃除をした時は大きいもので自転車が3台ほど、大きな排水などに使うパイプ、大きな鉄板などが見つかり、以前はブラウン管テレビなどが見つかったそうです。

昔から何度も川清掃をしているのにゴミはなぜ減らないのでしょうか?

現状対策としては、私が確認したところでは警告の看板が設置されているだけでした。他にゴミを減らす方法はないかと私なりに模索してみましたが、結局代案は思いつかず、ゴミを拾い続けこのような活動を行っていること。川に捨てられたゴミがその後どうなるかを私たちが発信し続けるしか、方法はないのだと思います。なので、私はこういった活動に積極的に参加し、川などの自然環境の清掃活動を行いつつ、今回のような場で、ゴミを捨てないように呼びかけていこうと思います。

最後に、「ゴミを捨てるのが面倒だと、その場に捨てていませんか?そのように捨てられたゴミが多くの生き物や人々に悪い影響を与えています。いま一度、自分の行動を振り返ってみましょう。もし、この記事を読んでいるあなたがこのような事を行っている場合は、すぐにやめましょう。また、やっていない人もこのような事はせず、積極的に清掃活動などに参加してほしいです。」

（万代高校端艇部　1年　男子）

＊通船川の水面のゴミ掃除は新潟県・新潟市・当会の三者協定による「うるおいの郷土はぐくみ事業」の一環として実施しています。

report 03

座談会「新潟水辺の会の35年をふり返って」

2022年10月15日に新潟水辺の会は35周年を迎え、今回、水辺だよりも100号を発行することができました。

この機会に会員に集まっていただき、発足当時のことや様々な思い出を語ってもらいました。

座談会の様子

座談会は新潟市市民活動支援センターで行い、会員の大熊孝(初代代表、現顧問)、相楽治(現代表)、加藤功(副代表)、山岸俊男(副代表)、梶瑶子(副代表)、大崎信子(世話人)、松野直一(元世話人)、長谷川隆(世話人)、渡邊充(世話人)、森本利(事務局次長、座談会進行役)が対面で、土方幹夫顧問がリモートで参加しました。(以下、敬称は省略します)

森本　発足当時の思い出をお話ください。

相楽　水辺の会は、福島潟のNIRA調査委員会で大熊新大教授と出会い、市民によるドブ川再生ドキュメント映画「柳川堀割物語」の上映会を相談したのがキッカケ。有志で「新潟の水辺を考える会」を立ち上げ、1987年10月15日(木)の上映で約400人が集まり、「これで終わったらもったいない」(故人:進 直一郎)と言われ、家族ぐるみでの川ウォッチングが始まった。

2001年7月　NPO法人新潟水辺の会設立総会

大熊　柳川堀割物語は上映時間が長い映画だが、よく400人も集まったと思う。

会の発足は、私も映画上映会に参画していたこともあり、有志で相談した上、私が代表になった。

当初は川を見て歩く水辺ウォッチングなどを主にやっていたが、1989年柳川市で開催された第5回水郷水都全国大会に参加し、市民への情報発信が重要と考え、同年の欧州近自然河川工法視察ツアーの報告を兼ねて「水辺シンポジウム」を新潟大学工学部講堂で開催した。

C.W.ニコルさん、森清和さん、桜井善雄先生などが講演し、北方文化博物館の伊藤文吉さんをはじめ、400人を超える参加があり、希望に溢れた雰囲気だった。

2000年8月　英仏蘭運河視察ツアー

森本　自分と水辺の会との出会いはどんなところからでしょうか？

梶　1994年から東地区公民館に勤務したが、東区を流れる通船川は全く知らなかった。

公民館では自分で出来ることとして環境講座を行なった。

講座では講師として土方先生と雪上キャンプなどをやっていたが、土方先生からすごい先生が居ると聞いており、それが大熊先生だった。

会の活動で外国へ行ったり、日本全国を回ったり、自然の素晴らしさを感じ、自分が成長することができた。

松野　相楽さんから誘われ、1992年の第8回水郷水都全国会議新潟大会から参加した。

栗ノ木川で育ったので水辺には興味があった。

水郷水都全国会議新潟大会開催のために必死に募金集めをした事や、2004年からの栗ノ木川桜祭りが思い出に残っている。

大崎　1992年に通船川で活動していた星島さんから会を紹介してもらった

環境講座を通して会の人は頭脳集団と思った。

ヨーロッパやタイの研修視察旅行は良い経験になった。

■水辺レポート

加藤　大崎さん、梶さんから会の事を知った。通船川講座に参加し、舟乗るのが面白かった。

山岸　私は道路畑なので、ソウルの清渓川整備後の都市交通量がどうなったか知りたくて、2006 年の清渓川 & 中浪川視察ツアーに参加し、入会しました。
　大熊先生との出会は平成 9 年通船川改修計画の際、PI 方式で進める議長に先生の研究室へお願いに上がったときです。大熊先生の「洪水と治水の河川史」の中で多摩川水害の文章に感銘を受けました。

土方　1982 年に新潟大学へ赴任し、長野の黒姫での活動、早出川でのカヌー活動などダイナミックな自然環境でのプログラムを展開していた。
　会の活動には関心はあり注視していたが、忙しくて参加出来なかった。
　環日本海経済研究会で 500 年前に渤海国から日本海を渡り京都へ着いたという歴史を知り、1991 年に「日本海ナホトカ～新潟 1000km カヌー横断航海」実行委員会に相楽さん (水辺の会事務局担当) が事務局長として参加してもらい、水辺の会での積極的な活動が始まり、色々な人との出会いがあった。新潟は自然が素晴らしく年間通して活動することができる。会の活動を発展的に引き継げるように相楽さんにお願いしたい。

森本　会に参加して得た事や、会が社会へ与えた影響はどんな事だと思いますか？

山岸　2010 年の第 1 回大河塾に参加して、大熊先生の解説が誰にも分りやすくて、このような催しは、多くの市民の興味を増幅させ、人気で広がり 7 回も継続された。今後、類似した企画を期待したい。

松野　水質調査など地道な活動や普段メディアに乗らない情報を市民に知らしめることが重要だと思う。
　その中で栗ノ木川桜祭りは支援した甲斐があった。

加藤　会はこの指とまれ方式が基本で、個人の役割分担がうまく行っていたが、今は限界かもしれない。　今後、会がどうなるのか不安がある。
　会員・世話人各人が個性や特徴を持っていたが、それを今後どう引き継ぐのか。

梶　異質な人の集まりなので、各人から得るものがいっぱいある。
　今後、体が動かなくなると思うが、参加するだけで良い会にしてほしい。

松野　会にいると人の見る目（評価）が変わる。
　会に入って活動することにより知識が増え、人から尊敬されたと感じた。

相楽　国や県の委員に任命される一定の評価される会になった。朝日新聞や新潟日報が通船川活動での星島さんや大熊先生の連載記事が掲載され、市民目線での活動がピックアップされた。
　企業から寄付の申し出など、当会の社会的評価は高いが、会の規模は縮小しているというギャップ。会員個々の人生を犠牲しない程度での会の活動は継続出来るのか。環境問題が次の段階に入ったと感じている。（身近な自然であるはずの）里潟、里川で遊んでいる人がいない（使われていない）のが現状の水辺。自然と人の関係をどう作ってゆくか、次世代にどう繋いでゆくかが究極の課題だ。

フェンスが撤去された護岸で行われた栗ノ木川さくら祭りのカヌー体験

大熊　会員の活動で、河川工学者として孤立していた私をサポートしてもらい、ありがたかった。
　飲み会も多く、会員のみんなとコミュニケーションがうまくとれて楽しかった。私も 80 歳を越え、人生をうまく全うできそう。
　水辺の会は社会的にはそれなりに貢献して来たと思う。新潟市が 2022 年に「ラムサール条約湿地都市認証」されたのは、「1996 年ラムサールシンポジウム in 新潟」や「2008 年 KODOMO ラムサール国際湿地交流 in にいがた」に水辺の会が主催・協力してきた波及効果の一つと思っている。
　これからも湿地など大事にしたい。
　栗ノ木川階段護岸の閉鎖問題は「個人が自然との関わりをどうすべきか」というテーマを投げかけている。

土方　実践を踏まえた水辺の提案は、市民に浸透している。

（ここから長谷川隆さん、渡邊充さんが参加しました。）

森本　今後の水辺の会に期待する事は何ですか？

土方　学校のクラブ活動も学外指導になる時代で、市場が広がっており、事業として展開できるのではないか。
　規模は小さくても、色々な切り口から、始めても良いかもしれない。
　現代では、野外体験を知らない家庭が多く専門スタッフを育てることが必要と思う。

会として実践報告文を投稿し、社会的評価を得る。
沼津では使われなくなった学校施設の活用や国のまちおこしプロジェクトの活用が盛んだ。
障がい者、高齢者、幼児も参加できるプログラムの提供。
事故を起こさない学習会や関連団体との交流、国内外への情報発信などを行う。
次の世代が育っているので、自分も育てられた水辺の会を絶やさないでほしい。

2010年３月　長野県野沢温泉村の千曲川での鮭稚魚放流

加藤　今は一般会員が置き去りにされ、情報が伝わっていないので会員への仕掛けが必要と思う。
万代高校の川掃除の感想文を読んでも、自分たちでなんとかしたいという気持ちが伝わってくる。
会から情報を流し、参加を募ることが必要だと思う。

森本　以前行っていたようなウォッチングなど楽しい催しをやってはどうか。

梶　自分をはじめ高齢化が進んで活動ができないが会費会員も必要と思う。

加藤　どんな会員がいるのかわからないので新しい会員に参加を促すアプローチをしてはどうか。

大熊　コロナ禍ではあるが、飲み会がコミュニケーションツールとして重要だと思う。

森本　会の中で世代が二極化しても良いのではないか。

土方　伊豆の団体では月例報告として新人会員を紹介している。お茶会を行なっており、そこから交流が生まれている。高年齢は意識しないで、行動年齢が重要、談話するだけでも良いのでは。

相楽　会員との交流で、広報誌の発行拡大などは事務局の負担が大きい。かつて気軽にできた川ウォッチングなども復活させたいが、その準備を誰がやれるかと考えると悩ましい。
栗ノ木川階段護岸の閉鎖のショックは大きかった。通船川河口の桟橋で万代高校カヌーの活動などを見ていると、人の目が届いていることの重要さを感じる。使う人・見守る人の構図と、住む人の関りがあることが大切だと思う。
水辺を知らない人との接点をどう作るか？吉野川川の学校では人が育っている。その知恵が必要だ。鳥屋野潟公園のカナール de カヌー乗船体験の時に「ここにカヌークラブは無いのですか？」と聞かれたという。日常的に稼げるクラブ、子供を育てるクラブが必要ではないか。
当会ですべてやるのではなく、会は「受け皿を見つける・育てる側」にまわってはどうか。
当会は、外部から一定の評価があるので「連携する人や団体を見つけ・生かし」活動にコミットして行ってはどうか。そうなれば会員に他の楽しい活動に関わってもらう余裕ができる。通船川河口の森では花畑を作るなど一般会員が参加する新しい試みが始まっている。会員個々のこだわりやスキルを生かすため、会での事業別活動別の仕事・役割の分担を明確にしてゆきたい。

梶　新人会員の紹介コーナーを復活してほしい。

大熊　体が限界に来ている？
万代高校１年生の「ゴミを減らす方法はないかと模索してみましたが、結局ゴミを拾い続け、川に捨てられたゴミがその後どうなるかを私たちが発信し続けるしか、方法はないのだと思います。」という言葉が今後の活動への一縷の望みかもしれない。

長谷川　会の HP が充実すると情報が見えてくる。SNS 上での最新の情報発信は出来るのでやってみたい。大熊先生ミニ講座なども面白いかも。

渡辺　鳥屋野公民館や清五郎で活動し、３つの会に入っている。
会の動きがわかるように HP での情報発信が必要。
月1回程度で軽く会うこともコミュニケーションになる。

相楽　ゲストを呼んで集まる会も面白いが場所をどこにしたら良いだろうか。
川ゴミ掃除をエコポイント制にして見える化するなど誰にも見える活動にしてはと提案している。

土方　一部のスタッフに過度の作業負担が強いられているようで、新人にも苦労の過程を知ってもらうことも必要。補助・助成金に頼り過ぎず、自分たちの資金でやることも必要。
小さい子どもを対象に、多様な団体と交流して枠を拡げる。
これからも頑張ってください！期待しています！

新潟水辺の会 35 年のあゆみ

設立は 1987 年 10 月 15 日。宮崎駿監修・高畑勤監督の「柳川堀割物語」の上映＆シンポ開催をキッカケに、新潟の水辺環境について考える「新潟の水辺を考える会」を発足した。

会報第 1 号

原点は、映画で感動したドブ川再生というやっかいな活動を楽しみながら、水の文化や技を再生、人づくりやまちづくりに結んでいる「柳川市民のこだわり」です。

1994 年の通船川ドブ川再生活動の汗をかく会脱皮から、2001 年に責任をとる会の NPO 法人に変更。水辺再生まちづくりや流域連携・各地の水辺活動支援に取組む。

2006 年から大河信濃川の復活にも挑戦 。

水郷水都全国会議新潟大会予稿集（左）
当会発足 20 周年記念誌（右）

2015 年に鮭の信濃川復活 9 年間の成果で 2 千尾が宮中ダムを超える。

通船川では「つうくり市民会議」から「沿川まちづくりの会」に発展。

2014 年からとやの潟では「環境舟運」が試行され潟の復活創造の潟業が始動。設立から 33 年目になる 2020 年、より地域の産官学民連携・協働カヌーシェアプラットフォームの構築に着手し、災害や環境、魅力、資源評価で水辺の存在力がより鮮明になる中、次世代とともに新たな自然観としての「美しく、楽しい水辺」の実現に取り組んでいる。

新潟の水辺だより 100 号に寄せて：私が本紙の編集に携わったのは 2007 年 1 月発行の 68 号からだったと記憶しています。当時の自分は健康を損ねて失業と転職を繰り返し、経済的にも精神的にも厳しい状況でした。会の何名か八つ当たりをしてしまったこともありましたが、そんな自分を受け入れ見守ってくれたこの会の方々の存在はとてもありがたかったと感じています。家庭と仕事にしか居場所がなかったとしたら、ここまで回復することもできなかったのかもしれません。

そんな会の皆さんに少しでもお返しができればと 2017 年から事務局をお手伝いしていますが、伝統もあり、活動も多岐にわたる会を下支えするのは思った以上に大変でした。最近は体調を崩しがちであまり活動の現場に出られていませんが、復調したらまた水辺でたくさんの笑顔にお会いしたいと思っています。とりとめのない私事になってしまいましたが、あらためてここまで続けてこられたことを会員、読者、当会の活動を支えてくださった皆様に感謝申し上げます。　事務局：杉山　泰彦

編集後記：100 号を発行するにあたって、最初は「水辺の会のドキュメント」を本号に掲載する予定でしたが、まとめてみると A4 で 6 ページにもなり、掲載は難しく 12 月 3 日の水辺シンポジウムに配ろうと思っています。

その資料整理のために、水辺だより全号をファイルしたり、力作である「NPO 法人新潟水辺の会 20 周年記念 & 大熊孝・新潟大学教授退職記念　記憶される美しい水辺へ」（編集：金田英一、小船井秀一）を読み直して見ました。

これらを読んでいると様々な人々や出来事が浮かんで来ます。個人的には 1999 年の「全国川の日ワークショップ“いい川”部門」で星島卓美さんと通船川活動発表でグランプリを受賞し、その賞金 100 万円を旅費の一部にして、翌年会員 20 人でヨーロッパ運河視察ツアーに参加したことです。

今回、座談会に参加して水辺の会と共に自分も成長してきたと感じました。

これからは水辺の会も私も新しい形での活動のしかたを考えてゆきたいと思います。　編集人：森本　利

●発行：特定非営利活動法人新潟水辺の会
●事務局　〒 950-2264　新潟市西区みずき野 4-7-15　大熊河川研究室内
Phone　025-264-3191（留守番電話の際は伝言をお願いします。）
●ホームページ　https://niigata-mizubenokai.org　●メール　info@niigata-mizubenokai.org
●会員数　個人会員 81 名、法人会員 6 団体、家族会員 2 組、法人賛助会員 1 団体、顧問3名（2022 年 12 月 1 日現在）